

「田村」で生まれた

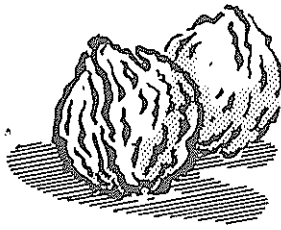
農業機械

藤本茂樹 (田村)

①

南国市田村の地は農機具の発達について、どうしても忘れることのできない地である。

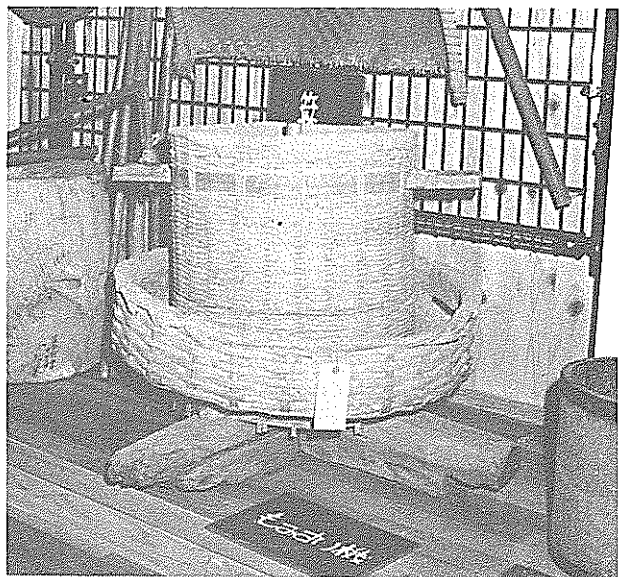
どうして農機具が生まれたか私なりに考えてみると、高知県で一番平野が広く米以外に作物のなかった時代であったから、何としても農作業の重労働から逃れたいということではなかったかと思われる。また、日本唯一の二期作地帯であり、その中心が田村であったことも大きな原因であると考えてよいであろう。



年代を正確にするには、もう少し時間があれば可能であるが、それも余裕がないのでご容赦のほどお願いしたい。私も田村の地に生まれたので、農機具の歴史を後世に残したと考えると、今から十数年前に人々に聞き書き記した、その書類を日章小学校の記念館に収めてあったので、記念館を探してみたいが見つからないので、思い出さなれど再び記してみた。

私は終戦後、後免町にあった農機具補修場に二年ばかり勤め、そのとき山岡真十郎氏と机を並べたことがある。山岡氏は戦前、戦後にわたり農業試験場の農機具の権威者であり、私が農機具についての知識を得たのは同氏のおかげである。

現在、私の知る限りでは、当時八十二歳の吉本正美氏ただ一人が農機具についての歴史を知っているので、お尋ねして貴重なお話を聞くことができた。



丸い竹籠を編み、人力で回して籾摺作業を行っていたころの道具 (高知農業高校資料館の展示物から)

籾摺機の無き時代は、直径約一尺ぐらゐの丸い竹籠を編み、それに赤土を入れ、籾の木を埋め固めたものを二つ作り、下は固定して上側のものを人力で回して籾摺作業をするもので、大変な労力を要した。大正の初期、関西地方から直径約七〇センチ、厚み約一五センチの小型の土臼が入って来た。これは旧型とほぼ同じ構造であるが、小型であり性能が良かったと、吉本正美氏が話してくれた。

吉本梅枝様氏が、この小型の土臼を板で囲い、動力で回して籾摺作業をする機械を作った。さらに、これに昇降機を付け、ふるいの網を付け、風で吹き飛ばして選別するようにになり、だんだんと進歩する道をたどったのである。

やや遅れて、吉本鶴次氏が朝鮮で逡巡をしていて定年で帰郷し、趣味も手伝って農機具を作るようになった。吉本正美氏の話によると、吉本鶴次氏は「芸者遊びをし

て金を使うのも、私が農機具の改良に金を使うのも同じことである。思い通りに農機具の性能が上がったときは、何ともいえずうれしい」(鶴次氏は芸者遊びはしていない)と、話していたとのこと。工場の西側、道端の看板に驚くくらい、特許八件と書いた看板が立っていたことを、小学生のころの私は見て知っている。

吉本鶴次氏よりわずかに遅れて、石川岩次氏と山本松治氏が籾摺機の製造を始めた。私も石川岩次氏を知っているが、最初の籾摺機の写真を見たことがある。箱の中で

前記土臼を回し、それにくっつけて磨き回して米と籾がらを選別するもので大型であった。現在のものは、二個のゴムロールの回転に差をつけて籾がらを取っているが、吉本鶴次氏は最初からロールで、一方は金剛砂ロールであったので性能は非常に良かったが、目減りがひどかったとのこと、吉本正美氏が話してくれた。

(つづく)